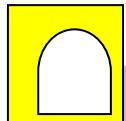


日吉台地下壕保存の会会報

第133号
日吉台地下壕保存の会

「青」を失くさないために

会長 阿久沢 武史

村上春樹に「青が消える」という短編があります。1999年の大晦日、世界中の人々がミレニアムのパーティーに浮かれている夜、主人公である「僕」はひとり青とオレンジのストライプのシャツにアイロンをかけています。その時シャツの青が消え、世の中のすべての青が消えてしまいます。青はすべて白に変わります。人々は誰もそのことに気づきません。「僕」が内閣総理府の広報室に電話をかけると、コンピューターで合成された総理大臣の声が次のように答えます。「かたちのあるものは必ずなくなるのです。」「それが歴史なのですよ。好き嫌いに関係なく歴史は進むのです。」「何かがひとつなくなったら、また新しいものをひとつ作ればいいじゃありませんか。」やがて町中の時計が12時を打ち、人々が一斉に歓声をあげ、新しい世紀を迎えます。

この小説は1991年に書かれました。村上春樹は8年後の近未来をどのように考えていたのでしょうか。そして2017年の大晦日はいったいどのように描かれるのでしょうか。

「僕」は「青」の喪失を納得できません。好きな色(大事なもの)だったからです。しかし、他の人々は誰も気にとめません。浮かれている間になくなってしまうもの、あるいは気づかぬままにいつの間にか喪失させられてしまうもの、それが「青」なのです。「総理大臣」の説明は、一見合理的に見えますが、そこには深みがありません。深い思索に基づいた責任ある言葉ではなく、たかがコンピューターの「音」なのです。

いまを生きる私たちの「青」とはいったい何でしょうか。気づかぬうちに喪失してしまったもの、あるいは喪失の危機にさらされているものが、この国にはたくさんあるように思われてなりません。「かたちのあるもの」を失くさないようにすること、「新しいもの」など簡単によく作ることができないということを、私たちは保存の会の活動を通して十分に理解しています。そして「好き嫌い」をはっきりと表明することが「歴史」を作るということです。

昨年12月の横浜・川崎平和のための戦争展で、講師の栗原俊雄さんはご自身の硫黄島での遺骨収集の体験を話されました。現場に立って一面の遺骨を目に

目次

<u>巻頭言</u> : 「青」をなくさないために	阿久沢武史	p1-2
<u>報告</u> : 救急救命講習会を受講して(2017.11.25)	岡本雅之	p2-3
<u>報告</u> : 2017.11.26 バスツアー		
「三浦半島・観音崎砲台群と横須賀軍港見学」に参加して	岡上そう	p3-4
バスツアーの感想	小山信雄	p4-5
<u>報告</u> : 第25回横浜・川崎平和のための戦争展(2017.12.3)	亀岡敦子	p6
報告とお礼	土屋健	p7
発表会での感想	遠藤美幸	p7-8
講演「一年中8月ジャーナリズム」を聞いて	佐藤宗達	p9
<u>連載</u> : 海外戦跡めぐり(7)旅順・中国	山田譲	p10-11
<u>報告</u> : 日吉台地下壕の初調査(1969年)記録冊子「わが足の下」		
地底研究会元会員にお話を聞きして	佐藤宗達	p12-13
<u>連載</u> : 地下壕設備アレコレ(20)自然通風	山田譲	p12-13
<u>報告</u> : 第12期ガイド養成講座始まる	阿久沢武史	p13
<u>連載</u> : 第一校舎ナート(13)幾何学的なデザイン(1)	阿久沢武史	p13-14
<u>お知らせ</u> : 第12回日吉台地下壕保存の会公開講座	よこはま	p15
第23回2018年平和のための戦争展inよこはま		p15
<u>活動の記録</u> (2017/10~2018/2月) :		p16

した時、呆然と立ち尽くすだけだったと言います。遺骨の中には、植物が背骨の中で根を張ったものもあり、地熱の高い不毛の地では人間の体が植物の栄養分になっていました。そうして残されたのは膨大な「白い」遺骨です。

新しい年を迎えました。2年後の東京オリンピックに向けて、これまで以上に国をあげて浮き足立つムードになるかもしれません。そうした中で大事な「青」を失うことのないよう、私たちは私たちのこの場所にしっかりと軸足を置き、世の中を注意深く見つめていきたいと思います。皆様のご理解とご協力をよろしくお願ひいたします。

報告

救急救命講習会を受講して (2017.11.25)

ガイド 岡本雅之

地下壕見学会で見学者が体調不良になり、途中で地下壕から退去せざるを得ないケースが私が参加するようになった、平成28年からでも数回起こっている。

幸いなことに、私が体験した事例は救命救急措置が必要なまでの重篤なものではなく、一例は、年配の方が作戦室で意識を失って二度倒れたが、幸いにもすぐに意識を取り戻されたので、ガイド2名が付き添い、一緒に参加された仲間の方と地下壕を出た。壕の入口で椅子に座って休み、本人とお仲間との間に「低血糖かもしれない、あめを買おう」という会話を耳にしたので、私が常に持っているブドウ糖の錠剤を提供した。一休みしてから、その方は見学会を途中でリタイアして帰宅された。

また、小学生の女子生徒が地下壕内で気分が悪くなり、途中でガイド2名が付き添って壕を出て来往舎まで戻り、そこで休憩しながら皆を待つというケースがあった。

他にも地下壕内で体調不良を訴える方が何人かあったようだ。話を聞くと、自分は「閉所恐怖症」という方も。(閉所恐怖症の方が地下壕に入るのは如何なものかという気もする)。

臨機応変に救急車を呼ぶ対応も考慮しているが、幸いなことにその様な事態は過去には発生していないようだ。いずれにしても見学者が安全に見学を終えることは我々ガイドの責任として、しっかりと対応していかなければならない。



AED 使用方法の説明をされる講師の方々

ガイドとして必要な応急手当の基礎知識を学び、心肺停止に対する一次救命措置を、実習しながら理解しようという狙いで、「救命救急講習会」が平成29年11月25日9時より12時迄、来往舎中会議室で開催された。ガイド11名が参加。講義と実技により心臓マッサージ・人工呼吸・AED使用法・止血の方法等を学ぼうというものである。

講師は港北消防署日吉出張所と消防団から二人の方に来ていただき、日程も午後から定例見学会のある土曜日午前中に設定された。

まずは講義で「応急手当の基礎知識」を学ぶ。「応急手当」とは病院に行くまでの手当を、けがや病気になった場所ですること。「救命措置」とは、けがや病気の中で最も重篤で緊急を要する、心臓や呼吸が止まった状態の中で、傍に居合わせた人がする応急手当てのこと。

この「救命措置」の手順を受講者全員が実際に行うことで、AEDの取り扱い方を含め、しっかりと学ぶことが出来た。(AED→電気ショックを与える機器)。以下「救命措置」の手順概要である。

- ① 要支援者を見つけたら近寄る前に前後左右の安全を確認する。
- ② 意識があるかないかを確認する→肩をたたき呼びかける「どうしました、大丈夫ですか…」これを3回繰り返す。
- ③ 周囲の人に協力を依頼→119番通報とAEDを持ってくるようにお願いする。
- ④ 呼吸の確認→普段通りの呼吸が出来ているか、斜め上から見て胸や腹部が動いているかどうかを見る。
- ⑤ 呼吸がないなら胸骨圧迫をする→胸骨の下半分を、重ねた両手で強く、速く、絶え間なく圧迫する。5センチくらい押し込む。1分間に100から120回のテンポで、30回やる。(かなりの重労働である)→次に人工呼吸を2回。
- ⑥ 人口呼吸→気道を確保してからマウスツウマウスで2回。(感染防止シートを使用)
- ⑦ この胸骨圧迫30回と人口呼吸2回の組み合わせを救急隊員と交代するまで絶え間なく続ける。
- ⑧ AEDが届いたらすぐに準備をして使用する。→音声ガイドに従って。(実際にAEDを使ったのは初めてであったが、音声指示通り、落ち着いてやれば意外と簡単だという印象であった。)

概略は以上のとおりである。胸骨圧迫や人口呼吸については地元の防災訓練などで経験したことはあったがAEDを実際に使ったのは今回が初めてであった。意外に簡単とは思ったが実際の現場でうまく手順どおりに使えるかどうか。また、胸骨圧迫・人工呼吸・AED使用の三つを、救急隊員が到着するまで繰り返すということもかなり重労働で厳しいと感じた。

「他の応急手当」として傷病者の管理法、患者にどのような体位を取らせて休ませたらしいのか。また、搬送方法について、担架を利用する方法、人の手で運ぶ徒手運送法、1名ないし2名、3名で運ぶ方法なども理解することが出来た。

消防署への相談電話は「#7119」で各種相談に応じてくれるとの事。私には初耳であった。これを機会に覚えておこう。

3時間の講習後、横浜市消防長印のある各受講者の名前の入った、立派なカード「普通救命講習修了証 I」を受領し、終了した。

とても有意義な講習であったが、緊急事態に遭遇した時、うまく対応できるかは不安が残る。万一の場合に備えて、特に見学会ではガイドとして見学者の安全に責任があることを念頭に置き、今回の講習で理解したことは常に心がけていきたいと思う。

報告（2017.11.26 バスツアー）

「三浦半島・観音崎砲台群と横須賀軍港見学」に参加して

運営委員 岡上そう

毎年恒例のバスツアー見学会、今年は横須賀、観音崎を巡るコースでした。天気も良く、絶好のフィールドワーク日和となりました。横須賀のヴェルニー公園ではイージス艦や潜水艦を間近に見ながら山田氏が詳しいレクチャーをして下さいました。

観音崎では海の見えるレストランで昼食中に演習帰りの自衛隊の艦船が次々に通過し、皆様大変盛り上りました。観音崎灯台を見学した後に現地ガイドの方と2班に別れ、観音崎公園の砲台跡、戦没船員の碑を見学しました。ガイドの方は歴史のみならず、植物や昆虫、地層等にも詳しく、一緒に歩いていて興味の尽きない一日でした。

また、今回バス駐車場を快く提供して頂きました横須賀美術館と、警備員の方に感謝致します。そして参加された皆様、大変お疲れ様でした！



演習から母港（横須賀）に帰還する艦船



観音崎灯台

(初代は明治元年建設。現在は三代目)



戦没船員の碑（大浦堡墨跡）※上・右共に



バスツアーの感想

運営委員 小山信雄

11月26日（日）朝、17名の参加者を乗せたバスは日吉駅前を出発し、1時間ほどで最初の目的地であるJR横須賀駅前のエリアに到着。ここは慶應元年（1865年）に、幕府の要請で欧州から派遣された造船技師（フランソワ・レオンス・ヴェルニー）の名前を冠したフランス庭園様式の美しい公園で、停泊する米海軍や海上自衛隊の艦船を間近に見渡すことが出来ます。フランス人のヴェルニーは、日本の近代化への先駆けともいいうべき「横須賀製鉄所（造船所）」の建設と運営に心血を注いだ方であり、園内の記念館に展示されている「100年以上使用されたスチームハンマー」や、今尚使用されている「ドライドッグ」等日本近代化の足跡に触れることが出来ました。ここ横須賀から、日本最初の洋式灯台「観音崎灯台」（1869年点灯）、群馬県富岡市の「富岡製糸場」（1872年開業）の建設等、日本各地に近代西洋技術が伝わっていったことを知り、とても感動的でした。

次に向かったのは「観音崎公園」。昼食後、「観音崎公園フィールドレンジャーの会」の方からガイダンスを受け、先ずここが、文化年間（19世紀初頭）江戸湾に侵入せんとするロシア、イギリス等異国船を防御する最重要拠点であり、会津藩が台場を設置し防衛に当たっていたことを知りました。明治維新を迎えてからは、東京が首都となり、横須賀が軍港として発展を遂げるに至り東京湾口の防衛が一層重要になる中、砲台、堡壘、海堡などが続々と建設されました。今回、明治13年起工の「第一砲台跡」「第二砲台跡」、明治15年起工の「第三砲台跡」、そして明治27年起工の「三軒家砲台跡」を案内して頂きました。現在はカノン砲（艦船の側面を狙う）や榴弾砲（甲板を狙う）の砲座跡や観測所・見張所跡が残されているのみであったが、「実際に砲弾が発射されたことは一度もなかった」との説明に、安堵感を覚えた。「伝声管」という、とてもシンプルな通信設備は、相手の声も顔迄はっきり認識できることが実感でき感動的でしたが、一番印象的だったのは、施設の建築材料である煉瓦の積み方が時代と共に移り変わって来たということでした。



フランス積み



イギリス積み

「明治28年辺りを境に、フランス積みからイギリス積みに変わった」との説明を受け、「何故だろう?」と疑問が湧きました。「技術的な問題なのか、或いは政治的な問題なのか?」明治28年（1895）といえば、日本は日清戦争の勝利国としての「講和条約」の内容について、三国干渉により修正を強いられ「臥薪嘗胆」が叫ばれた年。三国とは当時日本と直接利害の対立していたロシア（三国干渉後、間もなくロシアは旅順に大要塞を築くことになる）に加え、ドイツ、そしてフランスも干渉国に。その後、1902年の日英同盟締結、1904年の日露戦争（連合艦隊の旗艦『三笠』は made in England）へと歴史は動いて行くが、こうした流れと煉瓦積み方式の変遷はどんな関連があるのだろうかと思いを巡らせた。

私は高所恐怖症にも拘らず、折角の機会と思い、日本最初の洋式灯台（高さ19m）である「観音崎灯台」に登って、足元が震えながら、浦賀水道の雄大な風景を楽しみました。戦没船員の碑、大浦堡壘跡など廻り、ランチ会場である横須賀美術館に戻って見学は終了となつた。ガイド頂いたフィールドレンジャーの方々の専門的で分かり易い説明と案内のお陰でとても有意義なツアーを楽しむことが出来ました。

今回のツアーで、横須賀が日本の近代化や「守り」に如何に大きな役割を果たして来たのかを学ぶことが出来て、とても有意義なツアーとなりました。特に、横須賀（泊町：現在の米海軍横須賀基地）は私の曾祖父の時代からの故郷でもあり感慨深い一日となりました。そして、毎度の事ながら安全に私たちを現地に運んでくれた岡上さんに感謝申し上げます。

報告：第25回横浜・川崎平和のための戦争展（2017.12.2-3）

報告とお礼

副会長 亀岡敦子

2017年12月2日、3日の2日間、慶應義塾日吉キャンパス来往舎を会場として、第25回横浜・川崎平和のための戦争展が開かれました。地元に残る戦争遺跡を、一人でも多くの人に知ってもらうため、「展示」と「若者の発表」と「講演」を中心に、年に一度横浜（慶應義塾日吉キャンパス来往舎）と川崎（川崎市平和館）に会場を移して、開催しています。実施するのは、日吉台地下壕保存の会／登戸研究所保存の会／川崎中原の空襲・戦災を記録する会／みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会の4団体からなる実行委員会です。普段は、別々の活動をしていますが、毎年4月から実行委員会を開き、話し合いを重ねました。

今年のテーマは「平和のために 今こそ戦争遺跡を考える」と決まりました。戦争遺跡と呼ばれる遺構は、地震や水害のような自然災害や、開発という名の人為的破壊だけではなく、70余年の年月による劣化が懸念されるからです。何よりも、呑気に笑っている間に成立してしまった数々の法案が戦争遺跡を巧妙に蝕んでいるのです。私たちの活動の存在意義はそこにあるのではないでしょうか。

幸い今年は晴天に恵まれ、黄葉さかりの銀杏並木に映えるイベントテラスでは、各団体の写真や研究成果と実物資料がパネルに展示されています。来場者はそんなに多くはないのですが、みな時間をかけてじっくり観てくれます。受付にいると、説明を求められることもあります。また市民が描いたキャプション付きの戦争絵画も、数十枚展示しました。戦争絵画を提供してくれた人たちの中には、すでに故人になった方もいて、幼少期に空襲体験を持つ世代すらも高齢となりました。もう一度、広く呼びかけて、記憶を書き残してもらわないと、空襲に逃げまどいながらも、嘗まっていたささやかな市民生活の事実は、残らないのではないかでしょうか。

土曜日のみの初の試みとして、初めて「日吉キャンパスツアー」を企画しました。1時と3時の2回、1時間ほどの地上のツアーです。日吉台地下壕保存の会のガイドが案内しまして、2回とも10数人の参加があり、大変好評でした。

翌3日午前中は、目玉企画の「若者の発表」がシンポジウムスペースで行われました。今年は、法政第二高等学校と立教新座高等学校の2人の高校生の戦争遺跡についての報告でした。私たちは、若い人たちに研究の発表の場を作り、年配者がそれを聴き、共に考え話し合う、という機会を大切に考えてきました。

午後は、栗原俊雄毎日新聞学芸部記者による講演です。演題は「一年中8月ジャーナリズム～国家に戦争を始めさせないために～」。8月の風物詩のような戦争報道ではなく、一年中戦争報道にこだわり続けている栗原さんの、熱のこもった講演は、圧倒的な説得力がありました。最後に各団体の活動状況を報告し合い、今後への展望を語り合って、今年の横浜・川崎平和のための戦争展は終了しました。最後に賛助金をお寄せいただいた会員の皆様に、心から感謝申し上げます。時期も内容も、自分たちで決め、運営します。それも皆さまのお支えがあるからこそ可能です。



発表会での感想

立教新座高等学校3年 土屋 健

私の通っている学校である、立教新座高等学校では高校三年生の4月から11月までの約半年をかけて、卒業研究論文の作成を行います。この機会を使い、私は「日吉における戦争遺跡の活用」というタイトルで論文を作成しました。

日吉台地下壕保存の会の方からのインタビューや、自分の足で各地の戦争遺跡をめぐったり、それらのことから、日吉台地下壕の活用の仕方を自分なりに考察しました。そのことを、このような形で、様々な人に発表する機会を与えてくれたことに感謝したいです。

発表では活用の仕方として4つほど提示しました。しかし、卒業研究論文提出の前日まではほとんどというほど考察の答えが決まっていませんでした。理由としては、やはり戦争遺跡という難しい内容であり、答えの微かなイメージはあったものの、このようなものでいいのかという疑問もあり、なかなか答えを出せなかつたのを覚えています。

つまり、本論文での活用についての考察は高校生が約半年で思いついただけのものに過ぎないと感じていました。1989年に発足した日吉台地下壕保存の会ですら、長い年月をかけても未だにはっきりとした答えを出せていないということもあり、本論文の答えは正解である可能性すら低いのではないかと思ってもいました。なので、この論文は一つの答えを出したものの、本当に日吉台地下壕の活用方を見つけるためのスタートであると思いました。

今回の発表会では、自分の発表以外にも、様々な考え方を持つ人の発表も聞くことができました。今回の発表会を論文を書く前に聞いていたら、全く違う結論が出たかもしれないというくらい、色々なことを考えさせてくれました。それほど、今回の発表会では、強いインパクトを残して自分の中に残り続けています。

講演「一年中8月ジャーナリズム—国家に戦争を始めさせないために—」

(栗原俊雄 毎日新聞社学芸部記者) を聞いて 運営委員 遠藤美幸

昨年末の戦争展の講演は、毎日新聞社学芸部記者の栗原俊雄さんにお願いした。栗原さんは戦争関係の取材と執筆を得意とする。新聞記事はもちろんのこと、最近では『遺骨：戦没者三一〇万人の戦後』(岩波新書、2015年) や『特攻：戦争と日本人』(中公新書、2015年)などの数多くの著作も注目されている。

講演のテーマもユニークで栗原さんらしい。8月に集中する「マンネリ戦争ジャーナリズム」を批判し、自らは「常夏記者」と名乗る。「常夏記者」は一年中戦争の取材や執筆に余念がないが、夏の「繁忙期」に集中する「昔話」を繰り返すようなマンネリ取材はしない。とりわけ「常夏記者」はニュースの鮮度に拘る。そして、いまの日本の出来事とリンクさせ、私たちに鋭い問題提起を行う。

栗原さんは多くの戦争遺跡を取材してきた中で、今回は硫黄島（東京都小笠原村）を取り上げた。硫黄島は面積約23km²、品川区ほどの小さな島だ。この島はサイパンから1400キロ、東京から1250キロにある。73年前、サイパンと同様に硫黄島の確保が、日本の本土防衛の重要な拠点となった。それゆえ日米合戦で8万もの兵士をこの小さな島に投入した。戦争末期の硫黄島の戦い（1945年2月19日—3月26日）である。日本軍守備隊は地下深く壕を掘って応戦した。暑さに耐えゴールの見えない過酷な環境で40日近くの死闘を繰り広げた。食糧も弾薬も底をつく勝算のない「玉砕戦」。精神を病んだ兵士もいたに違いない。日本軍戦没者は約2万2000人。そのうち帰還遺骨は1万柱。未還者は1万柱以上に上る。

現在の硫黄島は遺族でも自由に渡島できない。海上自衛隊と航空自衛隊の管轄下だからだ。まして遺族でもない民間人の渡島は極めて困難といえる。そんな中、栗原さんは2006年、2010年、2012年と3回もの渡島を果たした。どれも栗原さんの諦めない熱意の結果だ。

とくに2010年は思いがけないチャンスに恵まれる。硫黄島遺骨収集事業推進のために渡島する菅直人首相に同行した。

栗原さんの渡島の目的も未帰還遺骨収集の取材だ。栗原さんは、硫黄島の遺骨収集の担い手が、70代以上の遺族（娘や息子）であることに衝撃を覚えた。遺骨取集は想像以上に体力と気力のいる重労働である。ここに自衛隊が関わるようなることが急務である。2012年、栗原さんは遺骨収集の一ボランティアとして再び渡島した。酷暑の中、オオムカデ対策に長袖長ズボンの完全装備で臨んだ。「植物が生えている下を掘ってみよ。遺骨に出会える。」遺骨が植物の養分になるからだそうだ。遺骨に7mmの穴がある。「あの時も食えなくて、死んでも木に食われるんだ。」ある遺族から出た言葉だ。

収集された遺骨はその後どうなるのか。実はほとんどが身元不明の無縁仏とされる。栗原さんは「身元が分かるのは奇跡に近い」と話す。流行りのDNA鑑定は身元が完全にわかる遺骨にしか行わない。DNA鑑定が広く実施されない最大の理由は究極の個人情報に依る。釈然としない現状である。無縁仏どころか、見つけ出されない膨大な遺骨が今も祖国に帰れぬままに眠っている。遺族の女性が栗原さんに「見つかった遺骨が誰か分からなければ、すべて父のものと考えます。」と話した。胸を打つ言葉である。

遺骨未帰還問題は戦後の日本政府の不作為の象徴だ。厚労省の推計で、第二次世界大戦の戦没者は310万人、うち海外（硫黄島、沖縄含）240万人。遺骨帰還は127万柱、未帰還は113万柱。113万柱のうちバシー海峡などでの海没が30万柱。中国のような相手国事情で収集困難な遺骨は23万柱に及ぶ。

未解決の遺骨未帰還問題に対して、日本政府もようやく重い腰を上げた。2016年から厚労省の肝入りで、一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会が発足し、未帰還遺骨収集をこの数年にわたり集中的に行う計画になっている。しかしながら、戦後73年を迎えた戦場を知り尽くした元将兵の大半は亡くなり、わずかな存命者も90代後半に差し掛かり、元将兵から戦死した戦友の情報を聞き取ることも困難な段階にきていた。さらに、かつての戦場がそのまま保存されていることはまずあるまい。このような状況で、戦争を知らない戦後世代の推進協会員が未知な現地に派遣され、途方もない数の未帰還遺骨をどのように収集するのか。非常に困難な問題に直面している。事遅しの感が拭い去れない。更に、中国20万、北朝鮮2万の未帰還遺骨問題は、日本の政治、外交問題に直結しているだけに早期解決は容易ではない。

栗原さんは最後に、次のように話す。「戦争の被害は何年経っても終わりがない。戦争を

はじめる人びとは戦争には行かない。戦争に行って死ぬのは若い人たち。この現実をいろいろな方法で知らしめすことが戦争の抑止力となる。」

栗原さんは戦争について多くの積み残した問題があると指摘する。例えば戦争孤児の問題だ。いまだ孤児の体系的な聞き取りがなされていない。情熱の人、「常夏記者」の出番はまだまだ続いている。



講演される栗原俊雄氏

連載

海外の戦跡めぐり (7) 旅順・中国

運営委員 佐藤 宗達

日露戦争(1904-1905)が始まると日本は制海権を確保するために旅順を攻略した。今でも旅順各地に戦跡が残っています。つい最近まで外国人立ち入り禁止地区で観光するのにも許可が必要であった。(一説には旅順港が潜水艦基地で、沈めない潜水艦が係留されているのを見られたくなかったとか) 現在は自由に廻る事ができ、大連から日帰りツアーが出ており二百三高地、東鷄冠山北堡塁、水師營会見所、旅順港を見て廻れます。

(1) 二百三高地：旅順要塞を3回にわたり攻撃したがロシア側の要塞は堅固で難攻不落であった。第3回攻撃の途中から二百三高地に重点を変更して激戦の末占領、ここに観測所を設けて旅順を砲撃、陥落させた。日露戦争後、指揮官：乃木將軍は高地に散乱していた砲弾などを集め、山頂に爾靈山と記した弾丸型の記念碑を建て戦死者を弔った。ここからは旅順が見渡せ戦略上重要な地点であることが納得できます。

(2) 旅順：旅順駅はロシア租借時の1900年代当初に建てられたヨーロッパ風駅舎です。残念ながら大連-旅順の直通運航は無くなりバスに頼る事になります。旅順駅の後の丘に白玉山塔があり塔の上から旅順港を見ると湾の入り口は半島と半島に挟まれて狭く、船を沈めて入り口を封鎖する閉塞作戦がとられた事が納得できます。この塔は日露戦争後、連合艦隊司令長官・東郷平八郎と陸軍第三軍司令官・乃木希典が日本兵の慰靈のために建てた表忠塔で上部に銘版がはめ込まれています。現在表面は削り取られ落書きも酷いですが、陽刻なので文字跡は残り、終わり二行の東郷、乃木の名前が読み取れます。また塔の基部の説明文にはこの塔を建てるにあたり閉塞船に使われた重しの石が使われていると書いてありました。なお旅順には博物館があり(当時は関東都護府満蒙産物館)大谷コレクション(浄土真宗本願寺派第22世法王:大谷光瑞が主に中央アジアで蒐集したもの)が展示されており、一見の価値あるものです。



二百三高地にある“爾靈山記念館”



旅順駅舎



白玉山塔より旅順を望む

報告

日吉台地下壕の初調査(1969年)記録冊子『わが足の下』
—慶應義塾高校生の調査グループ・地底研究会元会員にお話を聞きして—
文責 山田譲

《日吉台の海軍地下壕群をはじめて本格的に調査し、それを記録としてまとめたのが冊子『わが足の下——日吉地下施設の秘密』です。この調査研究は、慶應義塾高校1年生生徒たち16人の手で1969年6月～10月におこなわれ、同年11月の日吉祭で展示発表されました。その後1971年になって卒業を前にして、この調査研究を4人の生徒たちが上記冊子にまとめ、1972年3月に発刊しました。

この調査研究では、戦後24年という時点での詳細な地下壕現地調査とともに、地下壕築造時のこと直接に知る将校クラスの元軍人の聞き取りもしており、とても貴重な資料です。この調査研究をした地底研究会会員だった5人の方から、昨年8月1日と9月16日にお話をうかがいました。以下の記事は『わが足の下』に書かれていることと、これについて地底研究会元会員の方からお聞きしたお話を要約です。

なお、お話をしていただいたのは、中田晃氏、中島峰洋氏、渋谷昌也氏、田中友祥氏、川浦一郎氏。聞き手は当会の阿久沢、喜田、山田と慶應高校生2名です。》

(1) 地底研究会調査時(1969年)の地下壕の様子

連合艦隊司令部地下壕へは、マムシ谷の出入口(戦後の測量図の記号で1a)から入った。出入口は土で埋まっていたが上部の隙間から入った。人事局地下壕へは、高校側の出入り口(同上1c)から入った。土もかぶっていなくて入口がポツカリ開いていて簡単に入れた(中田氏)。理工坂脇の入口(同上3cの東側)は埋まりかけだったが、もぐって入りこんだ。他の出入口(同上4c、5c)は入れなかつた(川浦氏)。大学の理工学部に進学したので見ていたが、だんだんふさがれていった(中島氏)。126段の階段の上はふさがれていたが、小さな穴があいていて覗くと部屋が見えた(中田氏)。堅坑も上までのぼったが、上はふさがれていた(中島氏)。

連合艦隊司令部地下壕から航空本部等地下壕にいく途中は素掘りで、狭くなつていて這つて行った(中田氏)。暗号室から出入口の方は水がたまつていて20cm位。最深でヒザ上まであった。床はどこも濡れていて泥だらけだった(田中氏)。ゲジゲジがいっぱいいてザワザワしていた(渋谷氏)。高校脇の出入口(待避壕)はふさがれていたが、いつも見なれていて誰も何とも思つていなかつた。自分も上に登つたが足をすべらせてころんだ(中田氏)。

2年後に冊子にしたのは調べたことを残しておきたかったから。親に金を出してもらって、1冊200円で売つた(中田氏)。

(2) 当時、聞き取りをした日吉台地下壕関係者

[] 内は山田の注記

1. 富岡定俊少将——「日吉の地下施設をつくるのに初めから終わりまで関わっていた。」
(中田氏) [1944年12月5日より軍令部第一部長、戦後は45年12月より第二復員省史実調査部長。]
2. 貴島一男氏——「土質のことなど土木・建築の人で伊東三郎の部下。人事局地下壕もやつた。」(中田氏) [なぜか第3010設営隊幹部名簿に名前がない。階級不明。貴島掬徳(キクリ)大佐・施設本部総務部第一課長の子息か? 貴島掬徳氏は戦後伊東三郎氏がつくつた日東建設(株)の相談役。]
3. 千葉朝夫中尉——「電気設備のことをいろいろ言ってくれた。」(中田晃氏) [経理局第三課主計士官。生協ニュース50号に聞き取り記事あり。第一校舎北側にいた。]
4. 関根さん——女性の理事生。千葉氏の知り合い。経理局勤務か? 第一校舎にいて地下壕に逃げた。(冊子p28)
5. 伊東三郎技術大尉・第3010設営隊元隊長からも話を聞いている。

(3) 冊子の重要な記述とその証言者、補足説明 [「p5」等は冊子のページ数]

1. 日吉の地下壕の「工事による犠牲者は各部隊それぞれ二人、計六人」p5 というのは貴島氏の話。「召集された兵、朝鮮人からなる数部隊」p5 というのは富岡氏の話。「朝鮮人で亡くなった人の数も覚えていると言っていた。」
 2. 連合艦隊司令部地下壕の掘削ルートは、青写真ではアミダくじ型にしようとしていたが、「土質が悪いところはそのつど方向を変更し」p6、「折れ曲がった形で迷路のようになってしまった。艦政本部地下壕のようにしたかった」と貴島氏が言っていた。
 3. 艦政本部地下壕工事開始は「昭和20年1月」p5 というのも貴島氏の話。
 4. 人事局地下壕の中は「コンクリートの内部に木の内壁を設け、たれ落ちる水を両側に防いでいた。」p5 「当時はジュウタンが敷かれ、官家も出入された」p4 というのは富岡氏の話。「シャンデリアもあった」と言っていた。
 5. 通風——「自然通風を基本とするために、トンネルの方向を、この地域の地域風の方向とあわせて掘ってある。……普通部側はもっとも理想的」「高校側は……なるべく風の方向にあわせるようにしている。」「1.5m～3.0m/sec の通風があったとおもわれるが、実際には、ついたてによって……通風はほとんどなくなっていた」p6～7 [伊東三郎の昭和47年の回想記で、「自然換気風速1m/sec を目標において、地形・高低差・恒風・排水等を考慮に入れて」と書かれていることにはほぼ一致。この「恒風」は「この地域の地域風」のことになる。すなわち夏は西風、冬は北風。]
 6. 排水——「勾配は平均1/100」p7 [安藤広道研究室の測量データから計算すると平均2/100でほぼ一致。]
 7. 壁坑——爆撃で崩れたときに生き埋めになることを防ぐために「たて穴をつくって脱出できるようにしている。」p7 「壁坑にはコの字型の鉄棒でできた梯子がついていて、上まで登った。」(中島氏)
 8. 自家発電装置と消音器室——「排気ガスは発電機室に通された太いパイプによって簡単に排出」。「熱・騒音の処理については…小部屋（中に消音機室という記名がある）をつくった。この消音機室には水がためられ、冷却水の確保がはかられた。ここからパイプが3本出て、エンジンまで冷却水を送っている。……消音の役目を果たしているようであるが、そのしくみは不明」p11 「連合艦隊司令部地下壕の発電機室だった部屋の床には台座があった。」(中田氏)
 9. 便所——「地下施設の内部に水洗便所を設置するということは、日本で初の試みだったそうである。」p14 「トイレのところには朝顔便器の跡があり、反対側がトレーナ（溝）になっていた。水洗なのかと思った。」(中島氏)
 10. 「寄宿舎の前にキノコ型の壁穴出入口があった。放射能マークがついていた。（『別冊週刊読売』1974年9月号の写真を見て）これがそうだ。」(中田氏)
 11. 戦後の測量図——「これを描いたのはアメリカ人だ。数字や文字の書き方がそうだ。」(中島氏) 「この図面のことは知らなかった。塾監局からは『地下壕の資料は何もない』と言われた。」(中田氏)
- なお冊子には、巻尺とコンパスで測って作成した「地下施設詳細図」が描かれていて、とても高校生が作ったとは思えない出来栄えです。連合艦隊と航空本部等の地下壕、人事局地下壕、艦政本部地下壕の3ヶ所の測量図と、発電機室やバッテリー室の詳細図です。なお、第一校舎脇の待避壕は入口が塞がれていて、入れなかつたそうです。



チャペル近くの壁穴空気坑地上部分
(寄宿舎前と同型)

連載

地下壕設備アレコレ【20】

地下壕自然通風の工夫と仕組みがわかりました

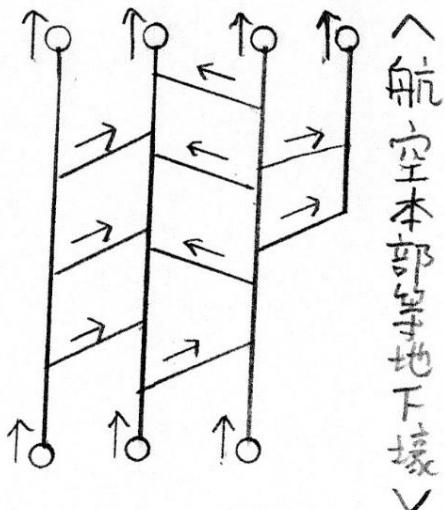
運営委員 山田譲

地下壕のガイドで私たちは、「みなさん、息苦しくありませんよね。ここは自然に通風するように造られています」と説明しています。これは第3010設営隊隊長だった伊東三郎・元技術大尉が「回想記」で書いていることを根拠にしています。伊東氏は「自然換気風速 1m/sec を目標において、地形・高低差・恒風・排水等を考慮に入れて設営中の隧道内を……風速計と湿度計をぶら下げながら、毎日計測して『まあまあ』であると報告してくれた苦心の地下施設」と書いています。しかし実際には航空本部地下壕では「通風換気を考慮しない隔壁兼用の書類格納ロッカーの林立により、たちまち通風は沈滞し、湿度は高まり、書類は湿気を帯びてくる始末」(『海軍施設系技術官の記録』所収) だったそうです。とはいっても現在の地下壕内には、ゆるやかに風が流れています。風の強い日には、はつきり風を感じます。と言つても現在の開口部は3ヶ所だけですが。それにしても、ここに書かれている「地形・高低差・恒風・排水等」というのは何のことでしょうか? 「恒風」というのは冬は北風、それ以外の季節は関東では西風が多いので、そういう自然の風のことだと推測できます。「地形」といえば日吉台は南北に長い台地ですから、東西に地下壕を貫通させれば西風が通り抜けるわけです。では「高低差」というのは何でしょうか? ちょっと見当がつきません。「排水」というのは通風とは違いますが、地下壕内はゆるやかな傾斜がつけられていて、湧き出す地下水を外に流すように作られていますから、これはわかります。全体として何となくわかるけど、やはりよくわからないですね。

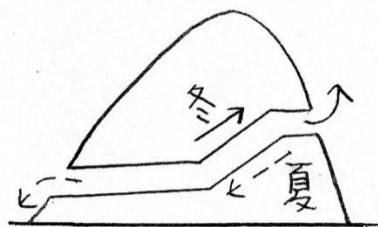
この疑問を解く答を、昨年、見つけることができました。それは『基地設営戦の全貌——太平洋戦争海軍築城の真相と反省』という本で、書いたのは佐用泰司氏(森茂氏と共に著)で後に鹿島建設副社長になった人です。この本には「換気に対しては、隧道を貫通せしめ、局部的に急勾配を用いて、両側出入口に高低差を付した。この坑内外温度差による換気法は特に南方地区戦訓の推奨するところであった。また風の流入および吸出作用を利用するため、夏季恒風を鈍角の方向より流入せしめ、出口は恒風と鋭角をなさしめて吸引を助成する等の工夫もこらされた。」と書かれていて、説明の図もつけられていました。(付図参照)

これとは別に、1969年の慶應義塾高校生徒による調査研究冊子『わが足の下』には、「通風は自然通風を基本とするために、トンネルの方向を、この地域の地域風の方向とあわせて掘ってある。……普通部側はもっとも理想的」という海軍関係者の聞き取りが書かれていました。(「普通部」は慶應義塾中学校の名称で、その近くにある艦政本部地下壕のこと。)

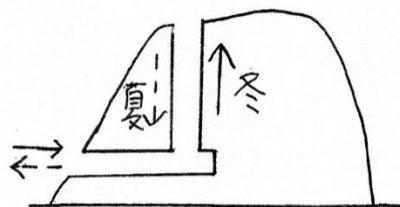
したがって、「地形」というのは、台地や丘の地形を利用すること。「高低差」というのは、地下の温度は年間を通して16~18°Cなので夏と冬は外気温とかなり差があり、壕内に高低差があると暖気上昇、寒気下降で自然に換気できるということでした。この効果は垂直堅坑を掘れば一層有効ですね。「恒風」は上記の通りで、風向きに対してまっすぐ向いていなくて斜めであっても、外風の流入と壕外への吸出の効果があるということのようです。これに関連してわかったのですが、アミダくじ型の地下壕では、台地を貫通する縦の通路を横につないでいる横向きの部屋が、縦の通路に対して直角でなく斜めに掘られているのも、この流入・吸出効果をねらっていたわけです。なぜ直角の梯子型にしないのかなあ、と私は漠然とおもっていましたが、ちゃんと理由があったようです。



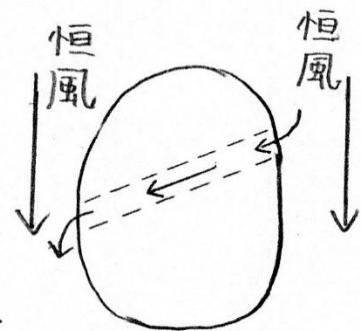
作図:山田



<高低差>



<堅坑>



<流入・吸出>

なお、長野県松代の大本營地下壕や八王子市の浅川地下壕は、縦横直角です。浅川地下壕は中島飛行機の地下工場でしたが、湿気がひどくて工作機械がさびついてしまったそうです。でも日吉も大差なかったみたいですが。もともと、地下にもぐって本土決戦だなどということ自体が、無茶な話だったんですね。戦争は、無理と無謀と愚かさのかたまりです。

報告

第12期ガイド養成講座始まる

運営委員 佐藤宗達

第12期ガイド養成講座が1月13日開講しました。「日吉のガイドをやってみたい、やれそ
うだ」という気持ちになつてもらうことを主眼として、知識でなく興味・関心が湧き立つよ
うな講座を目指しております。6名の受講者の参加のもと、阿久沢会長の挨拶に続き、小山
運営委員によるパワーポイントを使ったガイダンス、最近ガイドを始めた方々の感想・受講
者へのアドバイス、休憩をはさみ受講者も含め出席者の自己紹介をしました。第2回は3月
10日、戦争体験を聞く予定で元暗号兵・栗原啓二氏、元住吉・東京航空計器勤労動員・鈴木
京子さんのお話を聞きします。第3回は4月7日にフィールドワークで、普段は行けない
艦政本部地下壕周辺も見学します。第4回は5月12日、ガイド活動の実際・まとめを予定し
ております。昨今100名を越える見学会が増えてきており、1人でも多くの方のガイド参加
を心待ちしております。

連載

第一校舎ノート(13) 幾何学的なデザイン(その1)

会長 阿久沢 武史

第一校舎の西側の外観は、正面玄関を軸に南北に鳥が大きく羽を広げた
ようなシンメトリカルな構造になっている。竣工当時は陸上競技場との間
の木立がまだほとんどなかったため、グラウンドから見上げる校舎は、ちよ
うどいまの協生館から受けるような威容を誇っていたはずである。

アール・デコが最も特徴的に表れて
いるのは、この正面玄関である。メイ
ンエントランスは、直径1メートル・
高さ8メートルの4本の円柱による
柱廊で形成される。その両脇には屋上



竣工当時の第一校舎西側(正面玄関側)

福澤研究センター所蔵

までストレートに伸びる箱型の壁が前方に突き出し、それに縦長の窓が上下に並び、その上に円窓が配される。この窓は正面玄関の外観の中の唯一の円であり、全体の表情にアクセントを加えている。4本の柱は単純な円柱ではない。柱廊の天井部分を境に上部が四角柱となり、3階部分にバルコニーを作る。円柱と四角柱を組み合わせることでギリシア風の古典主義の純度が薄まり、モダンな印象が生み出される。校舎の正面入り口は3か所、中央には両開きの扉、その左右には片開きの扉を配し、扉の上部には上下に6つの四角な窓が並ぶ。壁は無表情な平面ではなく、複数の段差を付けることで幾つもの長方形が重なりあう立体的に変化に富んだ表情を見せる。中央の扉の上には、四角の枠の中に校名とペンの徽章が据えられ、メインエントランスにふさわしい風格を添えている。このように正面玄関は長方形と立方体を基調とし、円形の窓を含め徹底した幾何学デザインで統一されている。それは斜め下から見上げる角度でも同様で、柱廊の天井部分と3階バルコニーの天井部分を含め、いくつもの四角形が重層的に組み合わされたデザインとなっている。

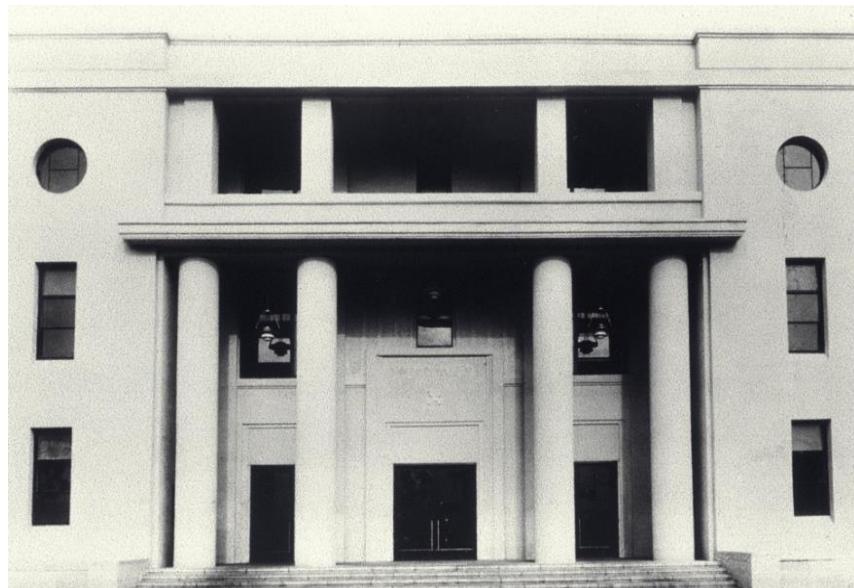
中央の校名は、現在では「慶應義塾高等学校」であるが、竣工当時は「慶應義塾大学」と「豫科」が2列に置かれ、ペンの徽章の下には「二千五百九十四年」と皇紀が記されていた。校名の上には、対角線が交差した図柄と横に4本の直線が並んだ図柄が入った正方形の枠が、縦・横に規則正しく並ぶ。これも中心軸に対して左右対称に置かれ、正面玄関の外観の幾何学的な形象を強めている。対角線の図柄は、ペンの徽章を象ったものであろうが、4本の線が並行する図柄が何を意味するのかはわからない。しかしながら、このレリーフもまたきわめてアール・デコ的であり、細部にまで徹底したこだわりが感じられる。こうしたモダンな装飾とギリシア的な柱廊は決して矛盾しあっていない。まさにクラシックとモダンが見事に調和した空間を作り出している。

※本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号

(2015年)に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート（二）クラシックとモダン」の再録となります。



予科時代の正面玄関
福澤研究センター所蔵



第一校舎正面玄関（慶應義塾大学予科日吉第一校舎西側入口）
1934年5月、福澤研究センター所蔵

お知らせ

第12回日吉台地下壕保存の会 公開講座

日時：2018年4月14日(土)午後1時～3時

講師：十菱駿武氏 山梨学院大学客員教授(考古学) 戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表

演題：『日本の戦争遺跡の調査研究と保存運動』—神奈川県の地下壕を中心に—

会場：慶應義塾日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

主催：日吉台地下壕保存の会

☆参加費無料 事前予約不要 どなたでも参加できます

※この講座は「港北区地域のチカラ応援事業」の補助を受けています。

※問い合わせ先：亀岡 (Tel 045-561-2758)

慶應義塾キャンパスを中心としたアジア太平洋戦争期の遺構は、戦争遺跡と呼ばれ、貴重な歴史の学びの場です。戦争遺跡を保存する動きは、およそ30年前から、日本各地で盛んになりました。戦争遺跡保存全国ネットワークの共同代表として、発足以来先頭に立って活動してこられた十菱氏に、保存運動についてお話を頂きます。

講師プロフィール

十菱駿武 1945年生れ 山梨学院大学法学部政治行政学科客員教授 考古学者(縄文、水晶、鉱山、戦跡) 文化財学 早稲田大学大学院文学研究科史学専攻博士課程修了

主に東京都と山梨県の多くの遺跡調査や審議会に関わる(世田谷区遺跡調査会調査団長・山梨県文化財保護審議委員など)

戦争遺跡保存全国ネットワークの発起人のひとりで 発会以来共同代表を務める

著作としては

『日本史のエッセンス』(有斐閣)、『しらべる戦争遺跡の事典』『続しらべる戦争遺跡の事典』(柏書房)ほか多数

第23回2018年平和のための 戦争展 in よこはま

横浜大空襲から73年

○日時 2018年6月1日(金)～3日(日)

○会場 かながわ県民センター

○展示 横浜大空襲・日吉台地下壕他約500点

○講演 小沼通二 慶應義塾大学名誉教授

○朗読劇 五大路子他「真昼の夕焼け」、

日吉台中学校演劇部などを予定

※詳細は次号会報(134号)でお知らせします

日吉台地下壕保存の会 30周年記念講演会

日時 2018年6月9日(土)午後1～3時

演題 「大学と戦争」から思うこと

講師 白井 厚 慶應義塾大学名誉教授

会場 慶應義塾日吉キャンパス

来往舎シンポジウムスペース

※講演終了後、第30回総会を開きます。

詳細は次号会報でお知らせします。

活動の記録 2017年10月～2018年2月

- 10/23(月) 慶應高校地下壕見学会 高校生2名
 10/25(水) 第25回横浜・川崎平和のための戦争
 展実行委員会(法政第二高校)
 10/26(木) 会報132号発送(来往舎205号室)
 10/28(土) 定例見学会 58名
 11/3(金) ガイド学習会(菊名フラット)
 11/7(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 11/8(水) 定例見学会 44名
 11/25(土) 救急法講習会(来往舎中会議室)
 定例見学会 67名
 11/26(日) 戦跡をめぐるバスツアー「三浦半島・
 観音崎砲台群と横須賀軍港見学」



雪が残るキャンパスと解体の進む日吉記念館
 (2018.1.24)

- 11/27(月) 慶應高校地下壕見学会 30名
 12/1(金)～3(日) 第25回横浜・川崎平和のための戦争展(日吉キャンパス来往舎)
 「平和のために 今こそ戦争遺跡を考える」

■12/1準備 ■12/2,3 展示 ■12/2 キャンパスツアー ■12/3 若者の発表・講演

- 12/5(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 12/13(水) 定例見学会 56名
 12/15(金) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会(かながわ県民センター)
 12/16(土) 定例見学会 42名
 12/19(火) 地下壕見学会 日吉台小学校6年生 90名
 12/24(日) ガイド学習会(中原市民館)
 1/9(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 日吉台地下壕保存の会 三つ折りチラシ作成(1000部)
 1/13(土) 第12期ガイド養成講座第1回(来往舎大会議室)
 1/17(水) 定例見学会 32名
 1/19(金) 地下壕見学会 駒林小学校6年生 89名
 1/24(水) 地下壕見学会 慶應義塾湘南藤沢高等部3年生 80名
 保存の会新年会(日吉東急駅ビル)
 1/27(土) 定例見学会 57名
 1/31(水) 地下壕見学会 日吉南小学校6年生 113名
 2/2(金) 地下壕見学会 岐阜大学田澤ゼミ 10名
 2/6(火) 運営委員会(来往舎205号室)
 2/7(水) 定例見学会 42名

★地下壕の定例見学会は予約申込が必要です。原則として毎月2回実施(第2水曜日
 10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分 所要時間2時間半)

★都合により変更する場合もあります。申込お問い合わせは見学会窓口まで。

Tel・Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会